静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成 21 年度－

平成 23 年 2 月 7 日

白木 賢信（東京家政大学）

Ⅰ　調査結果の概要

1.　利用団体が小学相当世代から中学相当世代にも広がりつつある。

利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12 歳」が 3 ヶ年とも最も比率の高いカテゴリであることは変わりないものの、「中学校」「13～18 歳」の比率がそれぞれ年々高くなっていることから、若干ではあるが利用団体が小学相当世代に偏っているところから中学相当世代にも広がりつつある。

2.　利用目標の達成度は、僅かに「期待以上にできるようになった」が増えつつある。

利用目標とその達成度について、3 ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標であるが、次いで比率の高いものは年々変化している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どであるが、その中で「期待以上にできるようになった」の占有率が僅かながら高くなっている。

3.　主な利用後の参加者の変容は、「周りの人に優しく接するようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」へ変化している。

利用後の参加者の変容について、上位の項目は 3 ヶ年で変わりないが、比率トップは「時間を守るようになった」から「周りの人に優しく接するようになった」や「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」へシフトしており、そのことから利用後の参加者変容の変化が示唆される。

4.　主な繰り返し利用することによって予想される変容も、「周りの人に優しく接するようになる」へ変化している。

繰り返し利用することによって予想される変容であるが、上位項目は 2 ヶ年とも変わりないが、比率トップが「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」から「周りの人に優しく接するようになる」へシフトしており、第 3 の利用後の参加者の変容の特徴の傾向と連動している傾向が予想される。

Ⅱ　調査の概要

1.　目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示するが、特に今回にあっては、センター第 1 期指定管理期間（平成 19～21 年度の 3 年間）における経年変化の傾向もあわせて提示することにしたい。

2.　内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

(1)　利用団体の種類
(2)　利用団体の主たる年齢層
(3)　利用宿泊数
(4)　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
(5)　利用目標の達成度
(6)　利用後の参加者の変容
(7)　繰り返し利用することによって予想される変容

3.　対象

平成 21 年度のセンター利用団体

4.　方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は下記の通り。

(1)　センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
(2)　各利用団体担当者は、センター利用後約 1 ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5.　調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率）　139（27%）　　有効回収率　139（27%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成 21 年度における統計上のセンター利用団体数（519 団体）を母数としている。

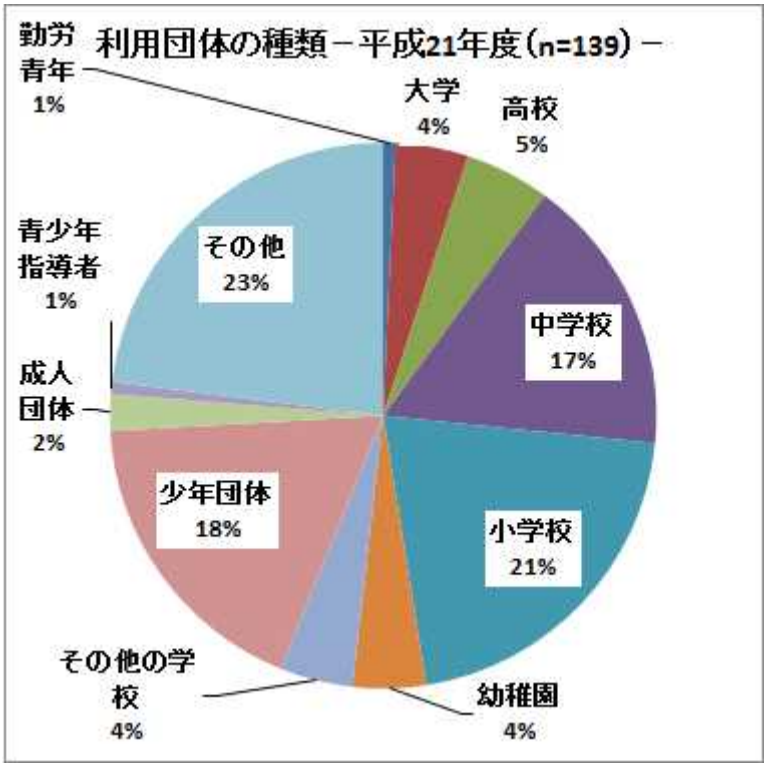
6.　実施期間

平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月

Ⅲ　調査の結果

1.　利用団体のプロフィール

ここでは､本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図 1)、最も比率が高いのは「小学校」の 21%で、次いで「少年団体」の 18%、さらに「中学校」が 17%で続いている。なお、学校関係は 55%で全体の半数以上を占めている。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

教会学校(3)、学習塾(2)、家族(2)、子ども会(2)、ボーイスカウト(2)、エコクラブ団体、NPO 法人、親子劇場、学習仲間、患者団体、教育相談機関、キリスト教団体、XC スキー合宿、子育てサークル（0 歳～小学生)、指導者、少林寺拳法、スイミングクラブ、スポーツ（スケート）団体、青少年育成団体、青少年相談所､センター主催事業の参加者及びスタッフ､単親の会､地域の住民(父兄･子ども(小学生以上))、ファミリーキャンプ、福祉施設、ミニバスケットクラブ

図 1　利用団体の種類

この利用団体の種類の平成 19～21 年度間の変化について示したものが図 2 である。これによると、中学校の比率は、平成 19 年度・11%、平成 20 年度・12%、平成 21 年度・17%と年々高くなっている。逆に小学校は 20%台で推移しているが、その比率は平成 19 年度・28%、平成 20 年度・26%、平成 21 年度・21%と年々低くなっている。その他、「少年団体」も 20%前後で推移しており、センターの代表的な利用団体の 1 つとなっている。

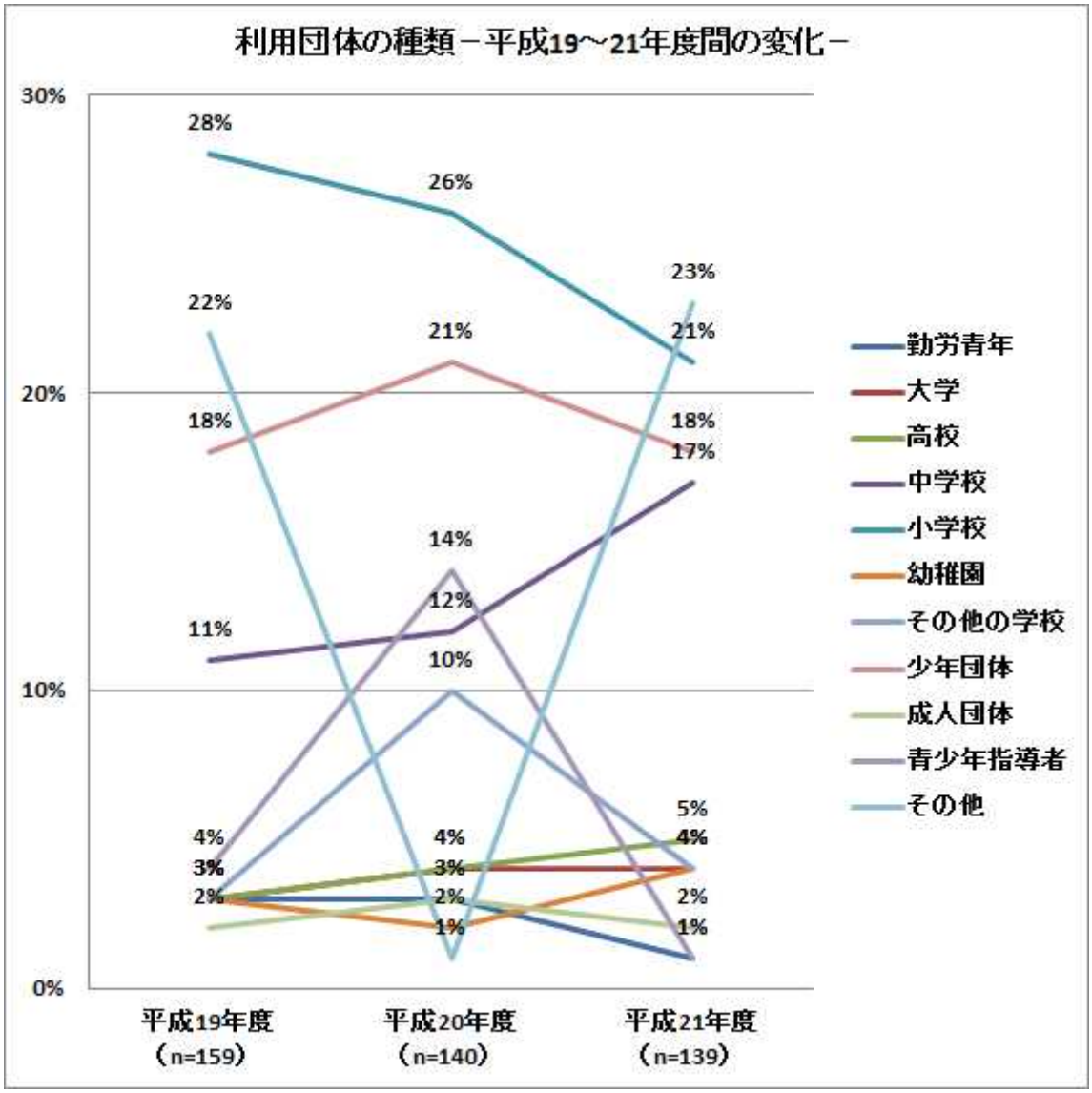


図 2　利用団体の種類－平成 19～21 年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図 3)、「7～12 歳」が 48%で最も高く全体の約半数である。次いで高いのは「13～18 歳」の 29%である。

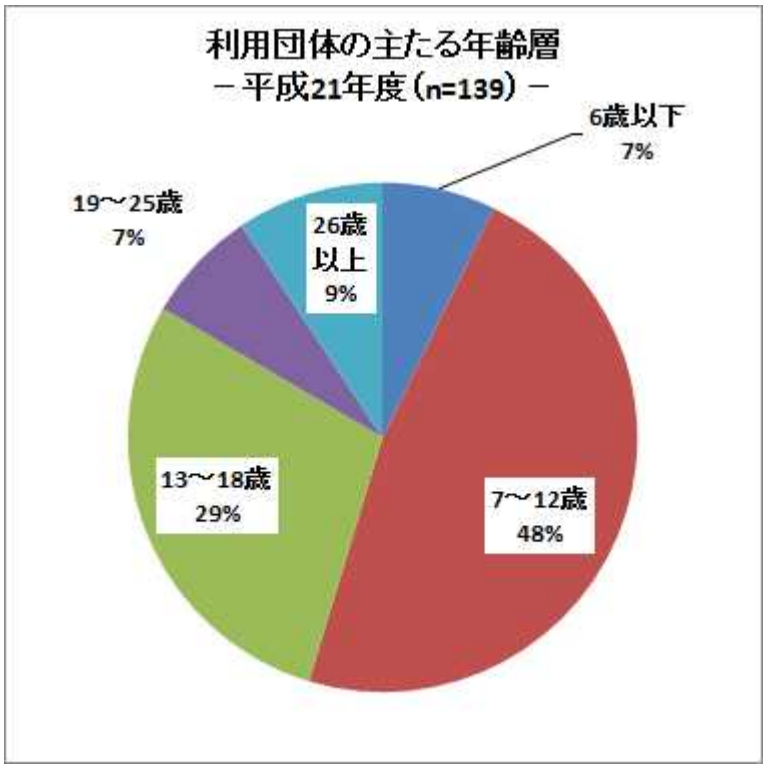


図 3　利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を平成 19～21 年度の変化でみると（図 4)、今年度最も比率の高い「7～12 歳」は 3 ヶ年とも最も高い比率ではあるが、この比率は平成 19 年度、平成 20 年度と比べると若干低くなっている。一方、「13～18 歳」の比率は年々高くなっており、平成 19 年度では 21%であったが、平成 21 年度では 29%まで達しており、「7～12 歳」の比率に徐々に接近している。なお、その他の年齢層はほぼ横ばいである。

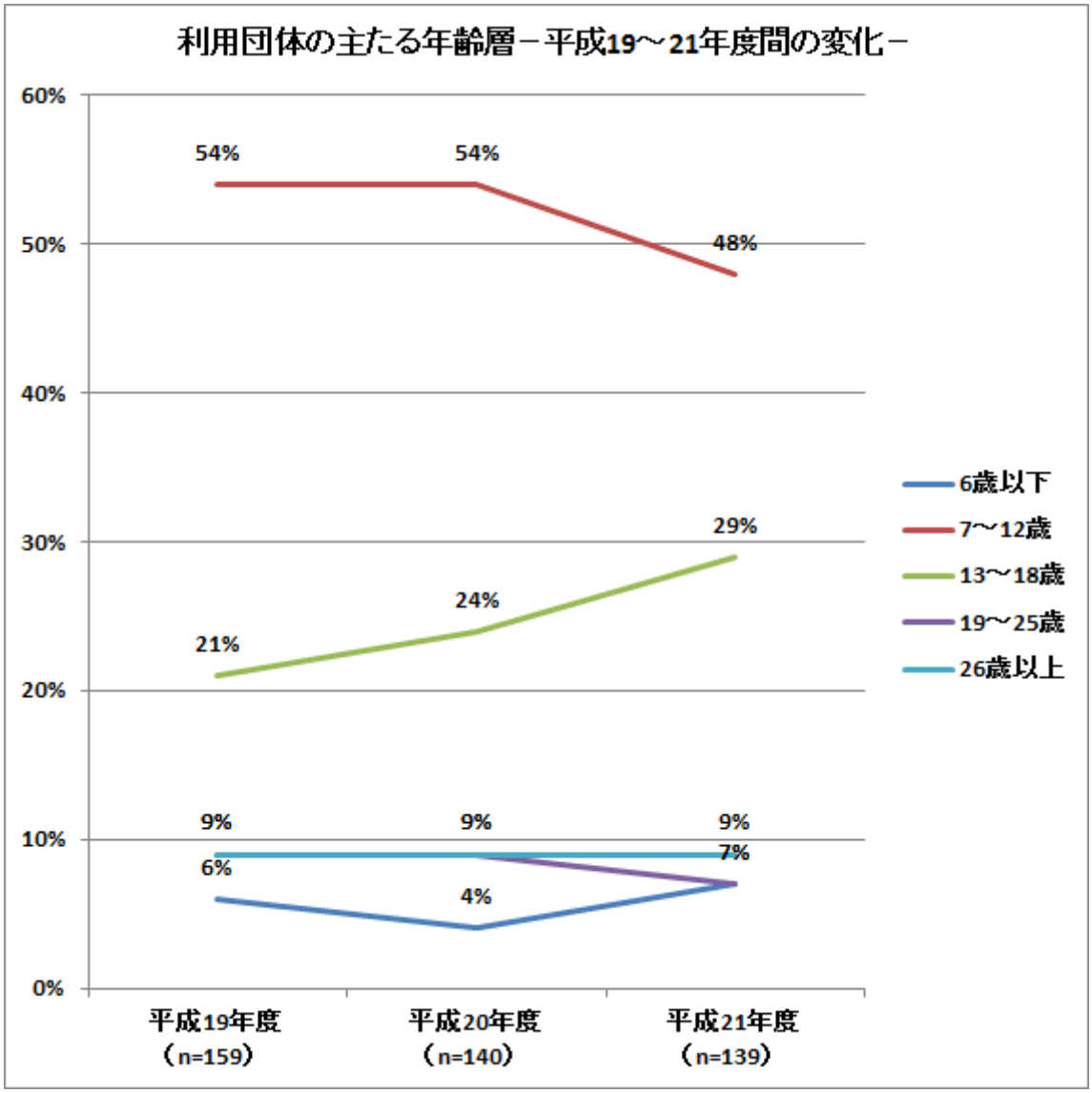


図 4　利用団体の主たる年齢層－平成 19～21 年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図 5)、「1 泊」の比率が最も高く 47%、次いで「2 泊」の 35%となっている。

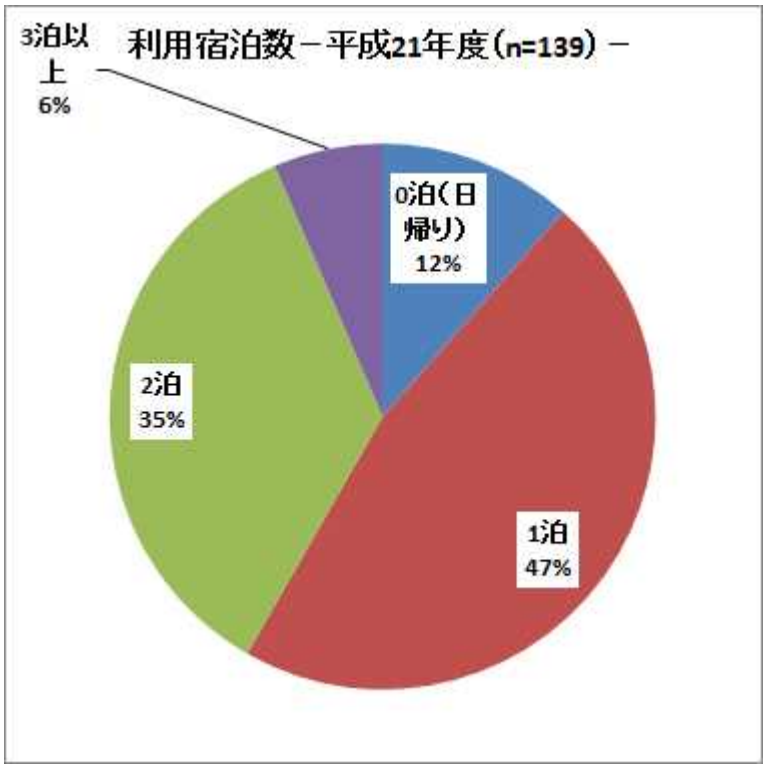


図 5　利用宿泊数

この利用宿泊数を平成 19～21 年度間の変化でみると（図 6)、3 年とも「1 泊」と「2 泊」が約 8 割前後で推移しており、年々その占有率が高くなっており、平成 21 年度では「1 泊」と「2 泊」の合計が 82%まで達している。一方、「0 泊（日帰り)」および「3 泊以上」の比率は僅かながら年々低くなっている。

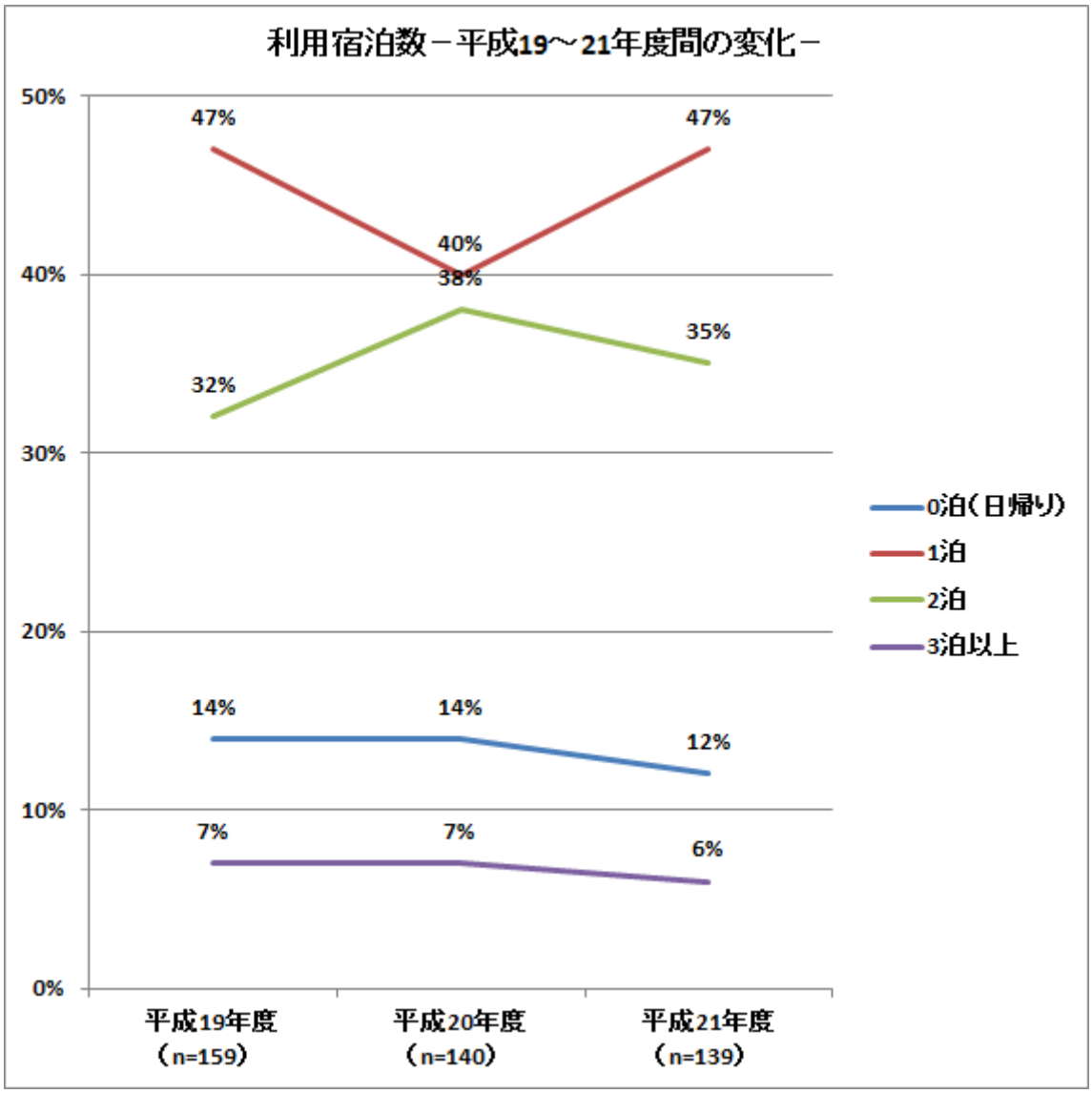


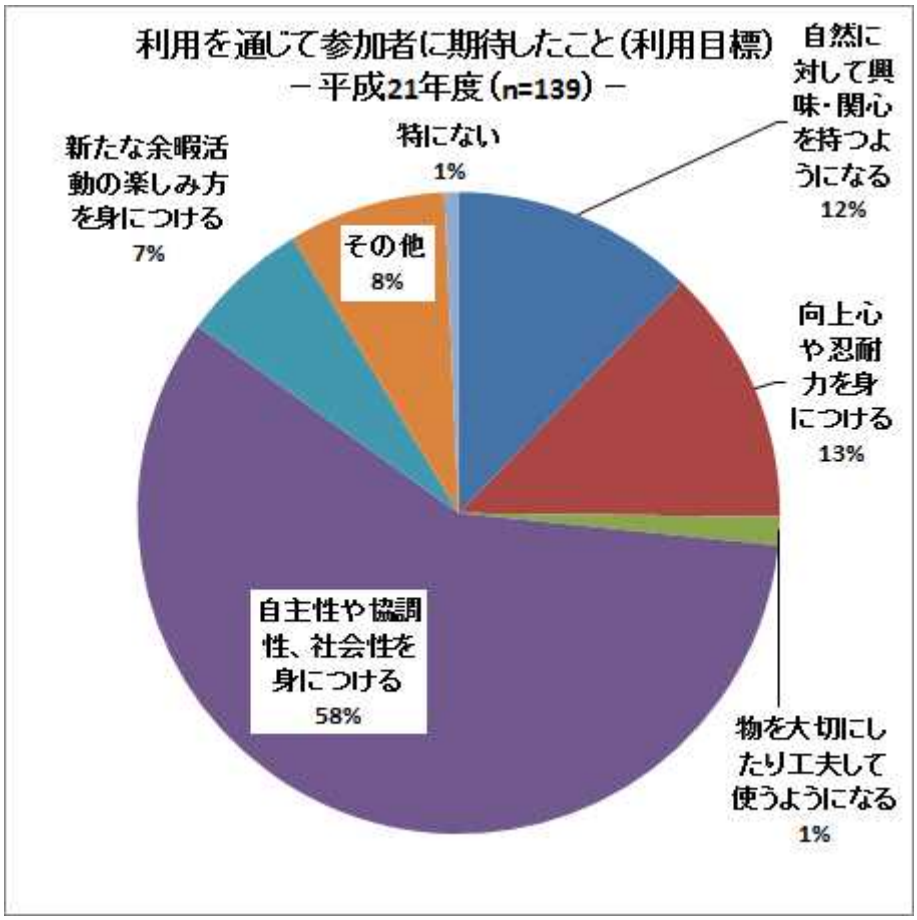
図 6　利用宿泊数－平成 19～21 年度間の変化－

2.　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する 調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成 8 年 7 月）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記 URL を参照（平成 20 年 5 月 15 日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/index.htm

図 7 で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」で 58%である。次いで「向上心や忍耐力を身につける」（13%）、「自然に対して興味・関心を持つようになる」（12%）が続いている。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

本研修に向けての準備・事前調査(3)、子どもに豊かな経験をさせ親子で楽しむ、自然の中で親睦を深めるとともに自他ともに高めあう、集団行動のルールを身につける、スケートができるようになる、不登校児の心理面のケア、自ら気づき考え行動できる、パラグライダー指導の向上

図 7　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の平成 19～21 年度の変化については（図 8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は 3 ヶ年を通じて最も比率の高い項目であるが、次いで高い項目は 3 年間で若干の変化が生じている。2 番目に比率の高い項目は、平成 19 年度は「その他」（17%）であったが、平成 20 年度は「自然に対して興味・関心を持つようになる」（12%）、平成 21 年度は「向上心や忍耐力を身につける」（13%）と変化している。なお、「その他」の比率は年々低くなっており、平成 21 年度では 8%となっている。

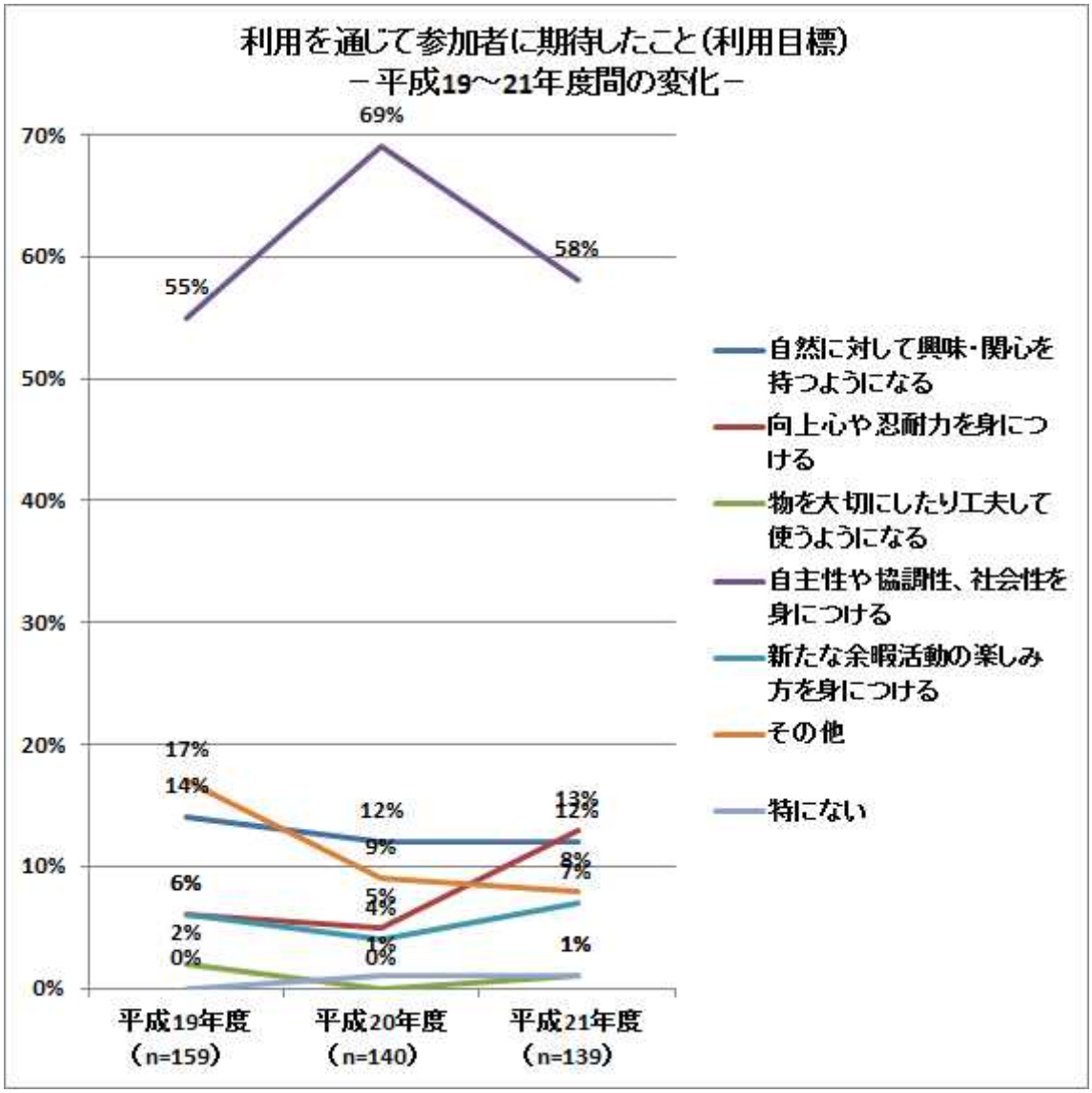


図 8　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成 19～21 年度間の変化－

3.　利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身が判断した。

その結果、図 9 のように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（77%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の 18%となっている。

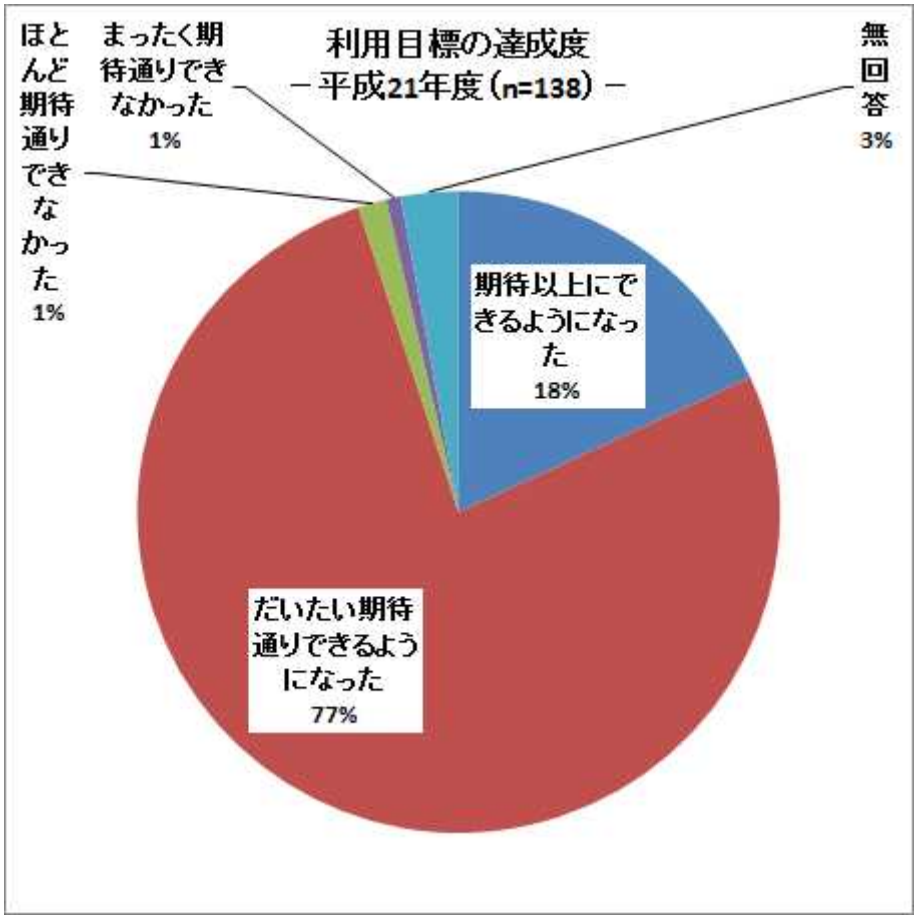


図 9　利用目標の達成度

この達成度の平成 19～21 年度の変化については（図 10)、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は 3 ヶ年を通じて 90%を超えている。その内訳をみると、「だいたい期待通りできるようになった」の比率は、3 ヶ年ともトップの比率ながら徐々に低くなっているのに対し､「期待以上にできるようになった」の比率は僅かに高くなっており、平成 21 年度では全体の 2 割近くに達している。

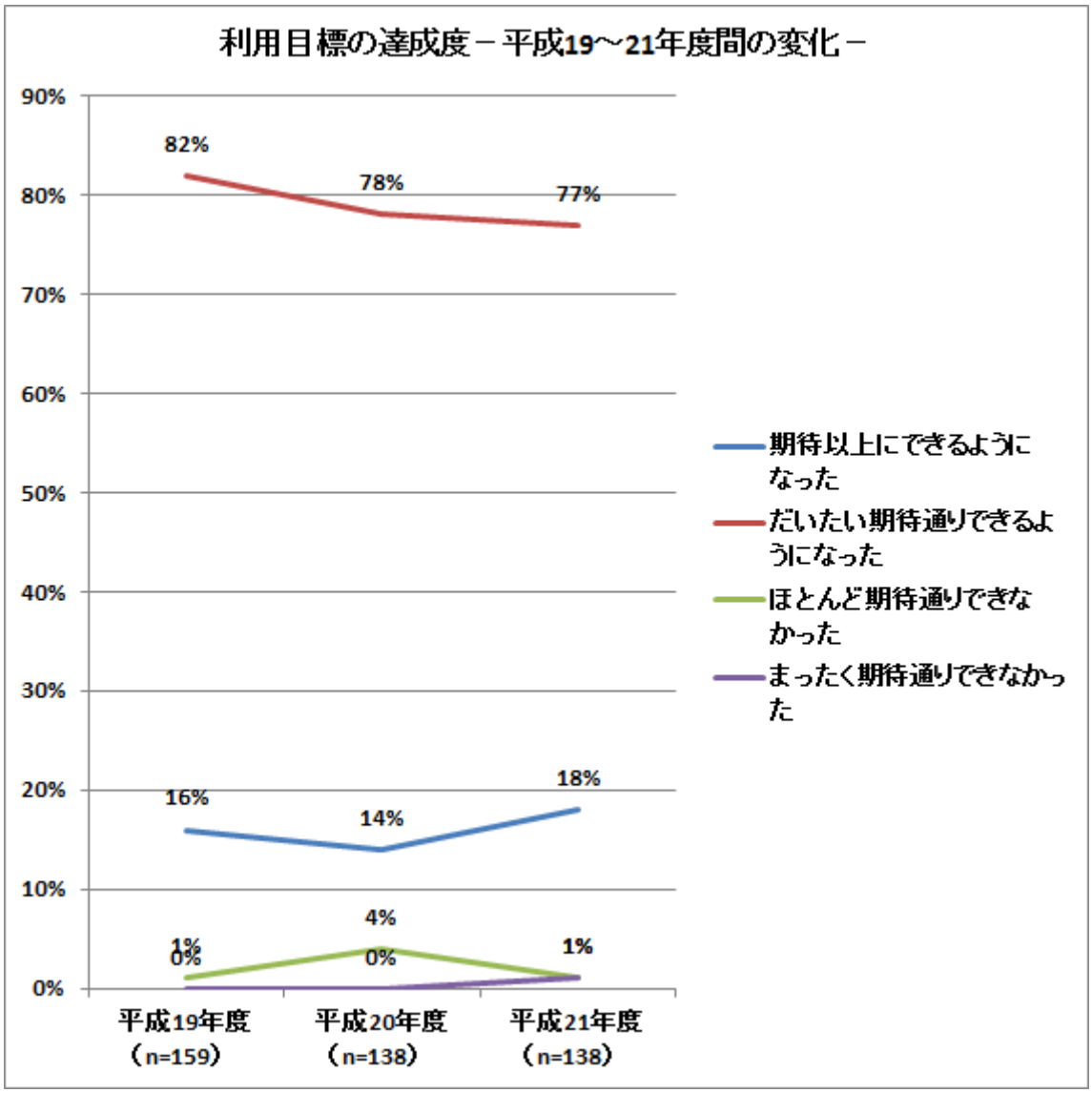
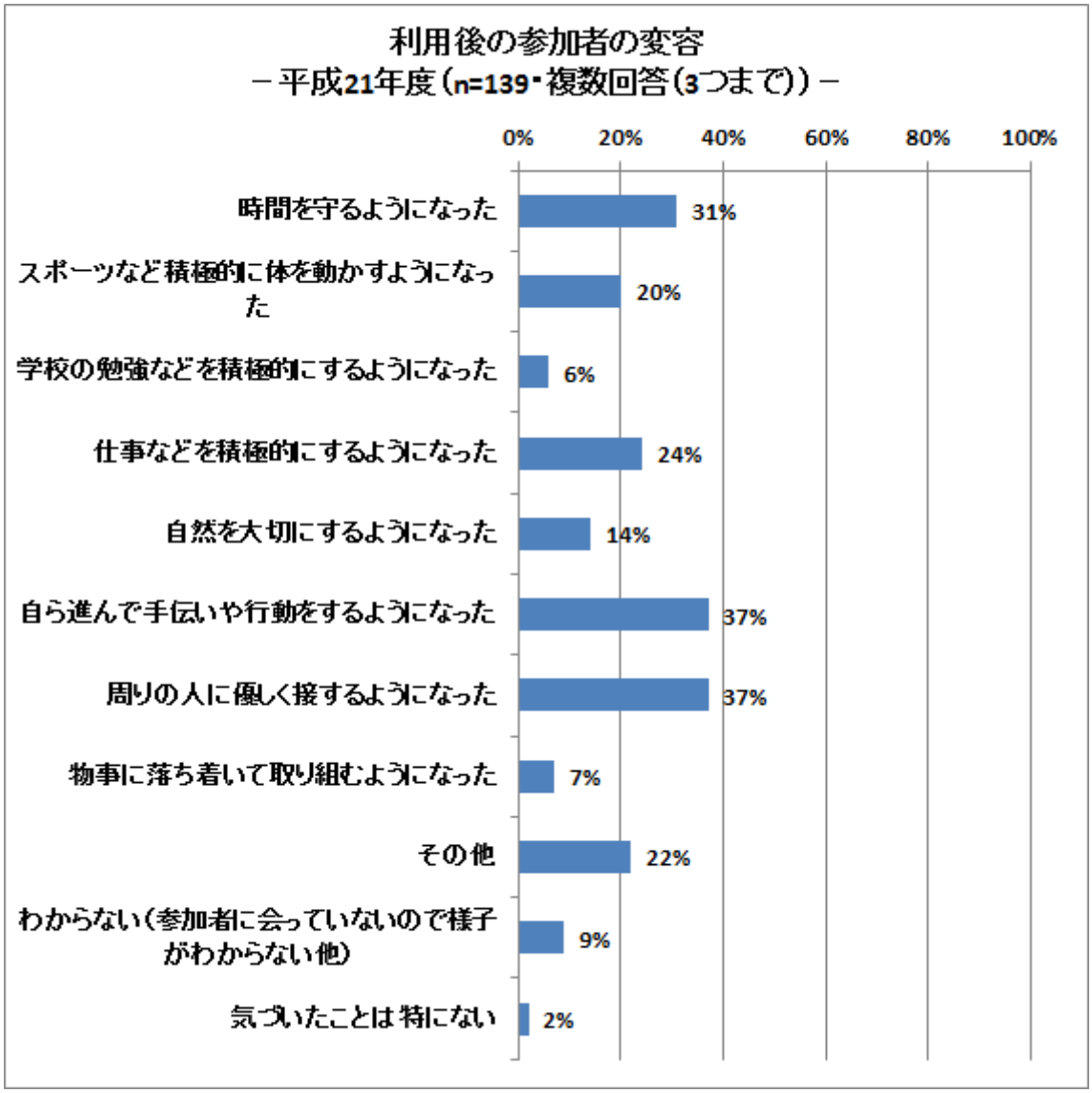


図 10　利用目標の達成度－平成 19～21 年度間の変化－

4.　利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後 1 ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3 つまで)、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」が最も高い比率で（ともに 37%)、次いで「時間を守るようになった」が 31%で続いている（図 11 参照)。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

仲間意識が高まった(4)、集団の１人としての意識が高まった(2)、友達の良さに気づくようになった(2)、明るくなった、改めてこのような経験の大切さを知った、以前にも増して友情が深まった、一歩自立に近づいた、キャンプ中の自らの行動をふりかえる事で反省点の改善につとめている、協調性が出てきた気がします、協力したり話し合ったりする活動がうまくなった、好奇心が強くなった、向上心・やってみたい心が育った、行動の理由付けができるようになった、信頼関係が強くなった、自然に興味を持った、集団行動を意識するようになった、集団の結束力が強くなった、情報交換の重要性、少し自信がついた、同期での輪が広がった様である、仲間づくりができたので劇場を楽しみにする気持ち劇場で会おう！という気持ちにつながった、病気への理解が深まった、表情が柔らかくなったように思う、本研修について関心が高まった、目的に対する答はすぐに出ない、夜親子で星をながめる機会が増えた、リーダーに協力しようとする姿勢が強まった、リーダーが自覚を持って取り組むようになった

図 11　利用後の参加者の変容

この平成 19～21 年度間の変化について（図 12)、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」は 3 ヶ年通じて上位 3 項目で変わりない。しかし、平成 19 年度は「時間を守るようになった」がトップであったが、平成 21 年度では 3 位である。一方、「周りの人に優しく接するようになった」は平成 19 年度では 3 位であったが、平成 21 年度では「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」と並んでトップである。なお、「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他)」は平成 19～20 年度は 10%台であったが、平成 21 年度は 9%に低下している。

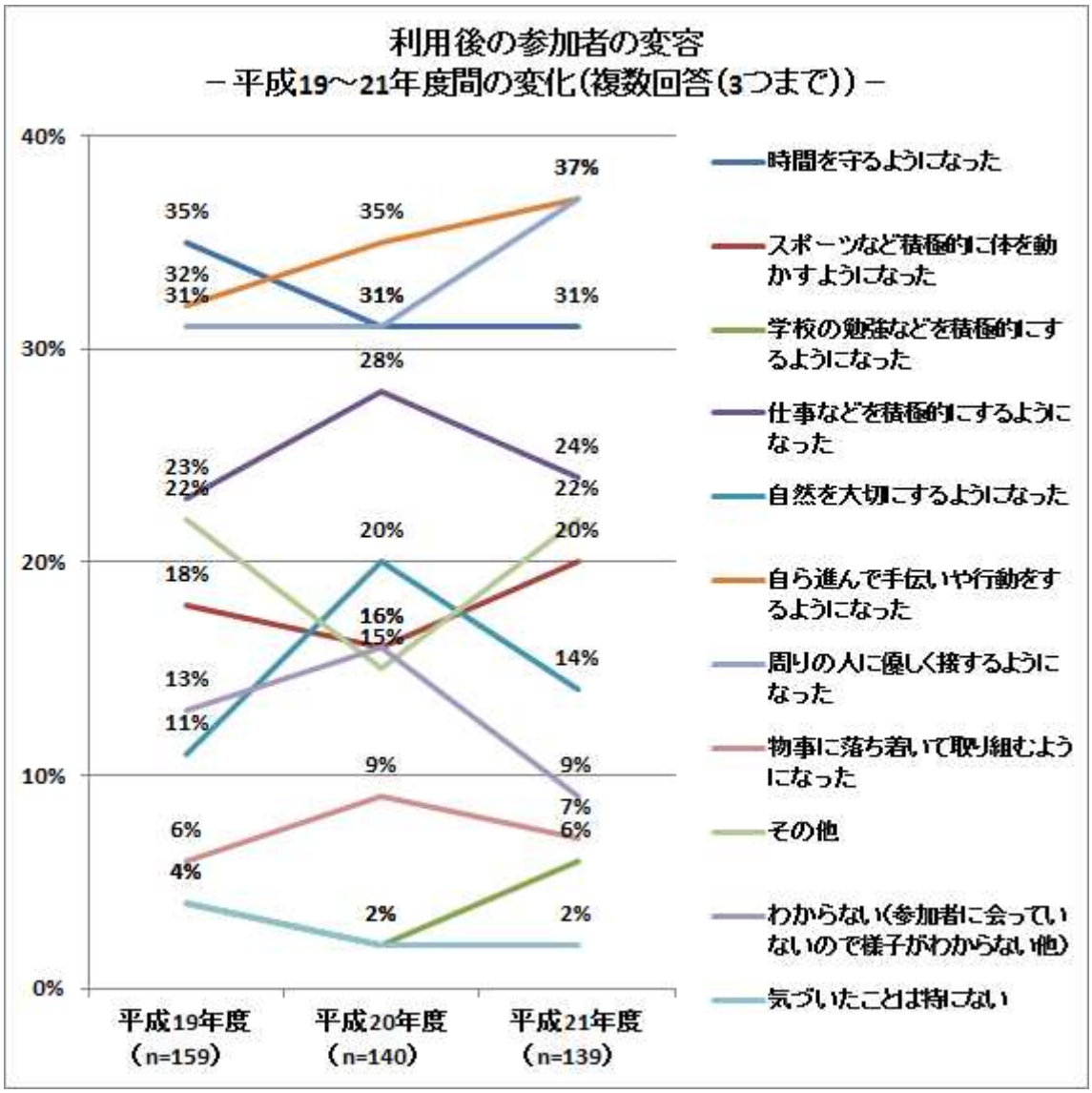
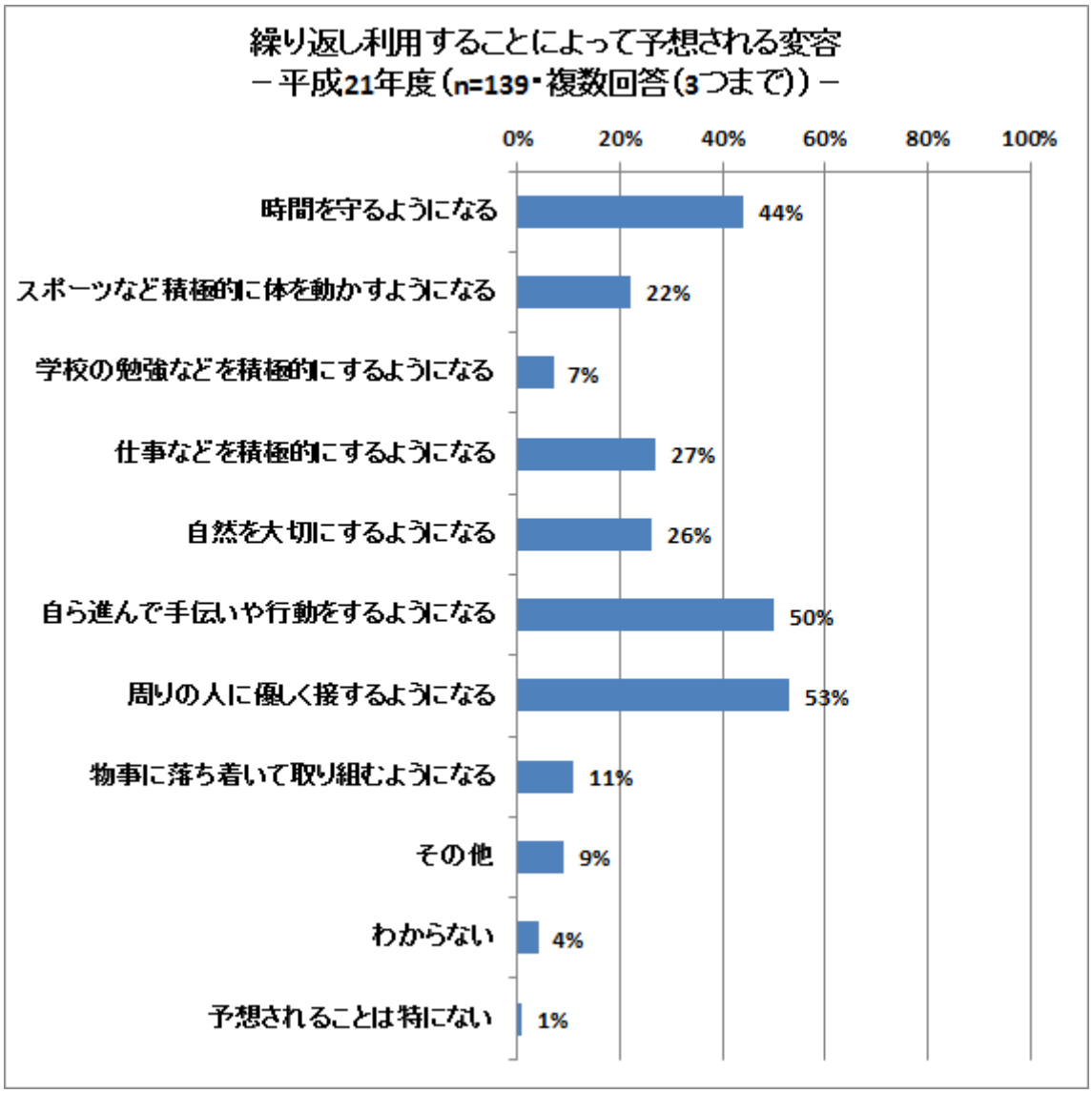


図 12　利用後の参加者の変容－平成 19～21 年度間の変化－

5.　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えることにした（複数回答・3 つまで）。その結果（図 13)、「周りの人に優しく接するようになる」が最も高い比率で 53%、次いで「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」（50%)、「時間を守るようになる」（44%）である。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

協調性が身につく(2)、新しいことも楽しみながら挑戦できる、安全に対する考え方、親子で楽しめる場所として今後も活用できる、環境への配慮を含め身体的にも精神的にも大きく成長できる、交流が深まる、参加者の持つ課題が違うため不透明、自己管理ができるようになる、自分の生き方在り方を真剣に考え前向きに取り組むようになる、自分のことは自分でする、小さい子の面倒をみる、天空に興味を示すようになる、バランス力を養う、1 つのことを集団でやろうとする時より協力的になる、めげまい・がんばる力と楽しさを見つけ出す

図 13　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は平成 20 年度からの調査に加わった項目であるため、図 14 の通り 2 年間の変化であるが、それによると 2 ヶ年とも「周りの人に優しく接するようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「時間を守るようになる」の上位 3 項目は変わりない。しかし、「周りの人に優しく接するようになる」は 9 ポイント高くなっているのに対し、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「時間を守るようになる」はそれぞれ 10 ポイント低くなっているという違いが見られる。

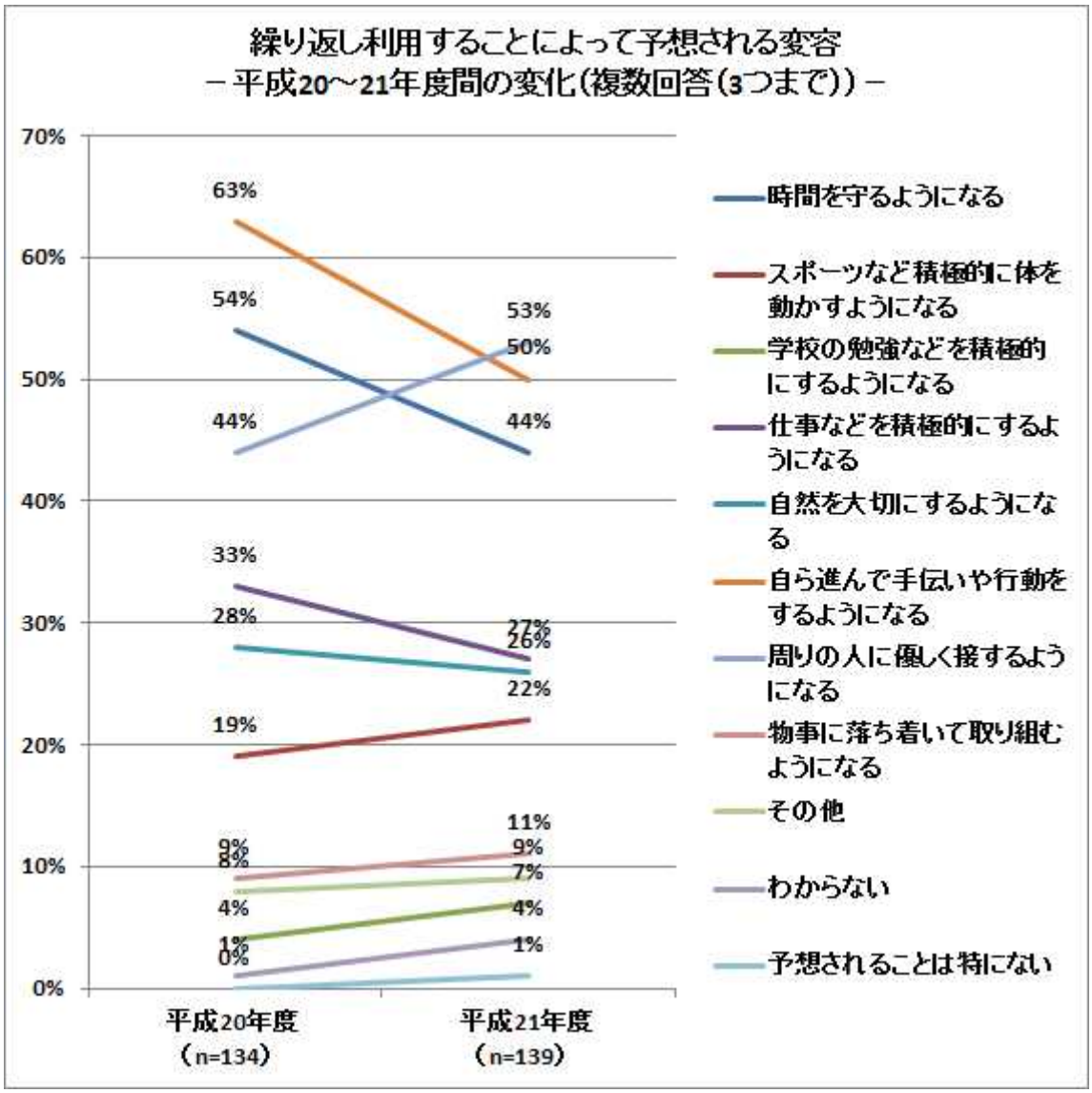


図 14　繰り返し利用することによって予想される変容－平成 20～21 年度間の変化－

Ⅳ　調査結果のまとめと今後の課題

今回の調査結果は、次の 4 点にまとめることができる。

第 1 に、利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12 歳」が 3 ヶ年とも最も比率の高いカテゴリであることは変わりないものの、「中学校」「13～18 歳」の比率がそれぞれ年々高くなっていることから、若干ではあるが利用団体が小学相当世代に偏っているところから中学相当世代にも広がりつつある。

第 2 に、利用目標とその達成度について、3 ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標であるが、次いで比率の高いものは年々変化している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どであるが、その中で「期待以上にできるようになった」の占有率が僅かながら高くなっている。

第 3 に、利用後の参加者の変容について、上位の項目は 3 ヶ年で変わりないが、比率トップは「時間を守るようになった」から「周りの人に優しく接するようになった」や「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」へシフトしており、そのことから利用後の参加者変容の変化が示唆される。

第 4 は繰り返し利用することによって予想される変容であるが、上位項目は 2 ヶ年とも変わりないが、比率トップが「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」から「周りの人に優しく接するようになる」へシフトしており、第 3 の利用後の参加者の変容の特徴の傾向と連動している傾向が予想される。

最後に今後の課題について述べると、第 1 は、3 年間で見られた変化の傾向が果たして今後も維持されるのかどうか継続して調べていくと同時に、その変化の要因を可能な限り探ることであろう。その際、センターの環境条件等の変化もその要因の 1 つである可能性もあるので、関係する外部データの収集も可能な限り行われることが期待される。

第 2 は、回収率・有効回収率が依然 20%台に留まっていることで、センター利用の支援にあっては、このような調査活動への理解を求めるとともに、回収方法等の検討も必要であろう。